



話し合った内容を発表し、情報共有。金色のシールはこの地域に住んでいないが定期的に戻ってくる親族。この金色の人が今後のキーパーソンになる可能も。



先よみWSで未来を予測 地域と共に今、できることから始めよう!

大学院 社会産業理工学研究所 社会総合科学域 准教授

田口 太郎 (たぐちたろう)

私達の生活と直結している人口減少、少子高齢化といった社会問題。身近な話題ながら普段あまり意識することのないこの課題を見える化し、今の暮らしがどう変わるのか、その変化にどのように対応し、未来に向けてどう行動するかを住民主導で考える「先よみWS(ワークショップ)」が、香川県まんのう町琴南地区で行われています。

7月下旬に行われた川東地域を対象とした今年度第一回のWSでは、地域の現状を把握するため、簡易な集落点検を実施。まずは集落ごとに分かれ、学生がファシリテーターとなり、地図に草刈りなどの共同作業を行う、地域の担い手となっている世代(18歳~74歳)の男性を青、女性を赤、18歳未満

の子供は緑、75歳以上は黄色のシールを貼り、現在の集落の人口構成を把握します。さらに、地域に住んでいなくても定期的に通いながら地域の担い手となっている転出家族の存在も同様に示しました。同じ要領でもう一枚の地図に+10した年齢のシールを貼って、10年後の集落の担い手の状況のイメージを掴みます。簡単な方法ですが、構成人口を視覚的に捉えることで、10年後の地域の姿が実感でき、集まった人達からは自然と問題点が挙がり始めました。

WSは3週間間隔で連続3回続きます。今後、課題に対してどのような手を打っていくか、その課題に誰が取り組み、何から始めるべきかを話し合っていきます。「人口が減るといえるのは、どうい



WSは廃校になった旧琴南中学校を利用して実施。まんのう町旧琴南町の人口は昭和60年、4,250人だったのが、平成31年には2,183人と半減し、地域の人達は危機感を感じています。

うことなのか。人口を回復するのは現実的に難しいので、どういう風に人口減少による問題を解決するかということ、みなさんと冷静に考えるということが大事です」と話す田口先生。人が減ることによって、今までできていたことができなくなってしまうことに目を向けると、これまで当たり前のように行っていた地域の活動が崩壊しつつあることに気がきます。

見てみると、例えば草刈りの人手が足りないなど、日々の共同作業に深刻に影響していると思えます。単純に人手を確保するというだけではなくて、人口減少によって問題となることにどう対処するか。自分たちの地域をより具体的にイメージし、地域の将来像を描きながら、未来のために何をしたいといけないかということを考えるのがこの連続WSの主旨です。

現在と10年後、それぞれに問題となることを書き出した付箋紙には、「5人組だったのが3人組になった」「運転免許返納後が心配」などが挙がり、「昔は冠婚葬祭も各家で行っていた、地域でサポートしていた」といった話も出て、集落を構成する世代も若く、地域という大きなつながりがあったことを感じさせます。

「この地域は高松空港から車で約30分圏内。高松市内からも近く、通勤可能エリア。そう考えるとまだまだいろんな可能性がある地域だと思えます。地域づくりは『新たな特産品を開発しよう!』ということだけではない。より現実的なことに取り組んで、取り組みのリズムがきたら少しずつ難しいテーマにも挑戦していく。ひとつでも行動に移すことで人口減少への対応が進んでいくと思えます」。

地域課題と向き合うとき、悲壮感が漂う雰囲気になりがちですが、学生たちも参加するWS形式でざっくばらんに話し合うことで、地域の未来を創造する建設的な場に。地域の人をサポートする学生たちの活躍が微笑ましく、たのしい授業でした。

